

Unfiltered 一偽りな  
く 原作者Aiyumi

惣江 羽奈香

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作：unfiltered

作者：Aiyumi

訳者：惣江羽奈香

校正：Aiyumi

URL：<https://archiveofourown.org/works/12227604>

<https://www.fanfiction.net/s/12671371/1/unfiltered>

ちよつとした甘い話を思いつきました。なかなか頭の中から離れない故、ストーリーにしてみました。

この作品は先天性TSしましたペルソナ5の主人公と明智吾郎の間の話となります。主人公の名前を漫画バージョンに従い、「くるす あきら」とします。もともと「あきら」は男性にも、女性にも適している名前であるため、変更するつもりはありません。（訳者より・女性の場合「あきら」の読み方で「暁」という漢字を使うのが滅多にないため、ここで「あきら」と呼び、「晶」と書きます。）

### あらすじ

晶はホテルで明智と出くわし、部屋を共有することになった。体調を崩した明智を看病している間、晶は彼のセレフ仮面の下に隠されて、抑えられていた、寂しい子供に気が付いた。その看病の間や後の甘い話となります。重大なネタバレ、友情、甘い話、および改心が含まれています。

### 前書き

細かい記述は苦手です。また、英語は私の母国語ではありません。（訳者より・訳者は中国人です。日常生活で英語も日本語も使えますが、いざ、翻訳しましょうとなりますと、さすがにネイティブ見たいなクオリティーを出せる自信はありません。恐らく文法

的なミスや表現があまい部分が出てきます。勉強しながら進む予定です。文法の間違いや理解できない表現があれば、ご指摘いただければ幸いです。）

### 注意書き

本編10月末以降の重大なネタバレがございます。また基本的に無印を基準として進んでいます。

中国語バージョンでは「明智吾郎のキャラクターが崩壊した。」とのコメントを頂いたことがあります。「この明智吾郎は私が好きな明智吾郎ではない。」と思った時点、速やかに本編の読みを中止することをお勧めいたします。

本文は原作者であるAi y u m iさんより許可を頂いたうえで翻訳を行っております。無断転載をお断りさせていただきます。

# 目次

第一章	一日目	1
第二章	二日目	33
第三章	三日目	59



# 第一章・一日目

九月九日 金曜日

今年、秀尽学院の修学旅行はハワイへ行くことになった。しかし、来栖晶は修学旅行に参加しなかった。その代わり、彼女はある起業家コースを受けることにした。晶はかなり前からこのコースを楽しみにしていた。そのため、二か月前、すなわち修学旅行の日程が公表される前から、このコースに応募した。晶は修学旅行のためにこのコースを取り消したくない。それに、秀尽はこのコースを正式の課外活動として認めているため、なおさらコースを諦める必要がなくなる。コースは金土日で行い、全部で三日となる。晶の友達は何曜日の飛行機で日本に戻るため、火曜になったら、またみんなと会える。

一日目の授業が終了した。晶は満足している。授業中ではかなり面白いテクニクを教われた。このテクニクはおそらく怪盗団のリーダーとしても使えるかもしれない、と晶は思った。

ホテルに到着した晶は、とある人物を見かけた。まさか、ここで彼に合うとは思いつかなかった。

「明智様はご予約を取りましたか？」

とホテルの受付の女性が聞く。

「いいえ、予約はとっていません。今回の旅はかなり急なものでして、さすがに前もって予約を取る時間がありませんでした。」

高校生探偵は髪の毛を整えながら答える。

「そうでしたら、申し訳ございません。予約なしでは、ご部屋を用意するのは難しいかと……」

「そうですか。」

明智は困っているような顔をして、考え始める。

「他のお客様が明智様と部屋を共有することを希望すると話は異なりますが……」

と受付の女性は言う。

「しかし、現在の明智様の人気を考えると、このような提案を受け入れてくれる方は少ないかと思えます。」

晶とこの高校生探偵は面識があつたくらいの関係だった。彼は常にテレビ番組で出演をしている時の仮面をつけている。そのセレブを偽っている仮面。そんなものは晶にとつて何の意味もない。実際、最初晶はこの高校生探偵のことを何も思っていなかった。しかし、あの日明智がルブランに現れ、少し自分の過去を語った。彼にあのような



過去があつたなんて、想像すらできなかった。「人を見た目で判断してはいけない。」とはこういうことだろう。そこで、晶は初めて、明智吾郎の仮面は彼の本性とは全く関係ないと気づいた。明智は一体どんな人なのか。晶はそれに興味を持ち始めた。残念ながらあれ以来、晶は明智と会つたことがない。少なくとも、今日まではなかった。

怪盗団がメジエドを撃退した後、明智の人氣は一気に下がった。受付の女性は一体本気で部屋を共有することを提案しているのか、それとも単なる明智に対する嫌味をしているのかはわからないが、晶は明智を知ることの機会を見逃すつもりはない。

「私と一緒に部屋のすることはできませんか？」

晶はそうやって受付の女性に聞く。

「あー！」

明智は彼女の声でびっくりした。振り向いて晶を見えた途端、目を丸くして、驚いた表情を見せる。彼は滅多にこんな顔をしない。

「来栖さん、こんな所で会うなんて、偶然だね。」

「私もここであなたと会えるなんて思つてなかった。いつまでここで滞在するの？」

「長くても日曜日で帰ると思う。」

「へえー、同じだね！良ければ私と部屋を共有しない？と言っても、ホテル側がオツケーと言わないと無理だけど。」

晶は受付の女性に目を向く。

「見ず知らずの方が同じ部屋を共有することは規定に違反しますが、お客様はどうやら知り合いのようですね。」

この話を聞いた明智は固まった。

「本ホテルでは団体のお客様にも楽しく過ごせるため、多くの部屋に多数のベッドを用意しております。」

受付は晶の予約を確認する。

「確認できました。来栖様のお部屋には二つのベッドが用意されています。この予約を二人に変更することでよろしいでしょうか？」

「ちよつと待ってください、お二人さん、本気ですか？」

明智の顔が真っ赤になった。

晶は当然みたいにならずく。

「つ、つまり……」

明智が照れそうに視線を下に向く。

「年頃の男女が同じ部屋に泊まると言っているのか。」

「何か問題があるの？」

晶がさりげなく言い出す。

「前も男友達と一緒に部屋で寝たことがあるし、あなたがここまで気にしているなら、私を襲うこともないと思うけど。」

「そんなことするはずないだろ！」

明智が慌てて主張する。

「じゃ、心配することないじゃない。」

その一言を明智に言い出し、晶はまた受付の女性に視線を向く。

「はい、変更をお願いします。」

\*\*\*

明智は不安な顔で来栖の予定を変更している受付の人を見ている。半分の代金を出した明智は、そのあと、来栖と一緒に部屋のカギを渡された。

ホテルの部屋は少し狭い。いかに、普通なホテルって感じ。しかし、明智は別に豪華な客室を期待していない。部屋の中に二つのベッドが置かれている、それで十分。明智は一つのベッドの上に腰を下ろし、来栖はもう片方のベッドに座り込む。明智はこの少女を警戒している。普段、熱狂なファン以外、明智を歓迎する人はいなかった。彼が孤児で、隠し子と知ったらなおさらのこと。明智は前、来栖に自分の家庭状況を明かした。それに、来栖は自分が怪盗団に対し、批判な態度を持っていることもわかっていて、来栖が自分の大ファンであるはずがない以上、なぜ彼女は自分と同じ部屋を共有したいと

言い出しただろう。来栖は絶対何かを企んでいる、そういうことに違いない。彼女は一体何がしたい。

「来栖さんはなんでこんなことをした？」

回りくどい話をせず、明智は直接聞くことにした。

「なんのこと？部屋を共有することの話？だって、明智君は泊める部屋がないって聞いたから、寝る場所がないまま放っておけなくって。」

「それだけ？」

「他に何の理由があるって言うの？もしかして、実は、何かを期待してた？」

「いいえ、そういうわけじゃ……」

なんとという無様。明智は常にフアンの問題やインタビューで聞かれたことに、完璧な答えを用意している。しかしながら、来栖晶と一緒にいるとき、頭の中が真っ白になって、何も言えなくなる。この子の思考回路は普通の人間と少し異なるらしい、その言動は明智にとつて理解不能なものである。

「来栖さんは僕に優し過ぎだなんて思ってる。」

「もしかして、明智君から見ると、私ってかなり酷い人なの？それは傷つくな、探偵さん。」

「ええ？」

明智は慌てて頭を横に振る。

「ごめん、僕はそういうつもりで言ったわけじゃ……」

それを聞いた来栖はふつと笑い出す。

「謝らなくていいって、ただの冗談だよ。もう、明智君ったら、硬くなりすぎ、力を抜こう。」

明智はまた彼女の突拍子の言動に驚かされた。一体どうするつもり。もしや、昔施設や学校で彼をよくいじめていた人達のように、からかっているの。それとも、油断させようとしている？何が狙いだ。

「でも、確かに別の理由もあるよ。」

その一言で、明智はまた警戒し始める。やはり、ほかの理由があった。

明智は疑心暗鬼になりやすい人。彼はこれまで、何回も離れていたところから怪盗団を監視したことがある。離れすぎて、はつきり見えないとはいえ、来栖晶の周りに集まっている独特な友達から推測して、彼女は怪盗団の一員であると明智は疑っている。もしかして、彼女も明智のことを疑っているのか。まさか、彼女は明智の後ろに付けて、ここに現れた。

「ちよつと、明智君と話がしたくて。」

来栖はさりげなく言い出したが、明智はさらに緊張してきた。こんなことを言って、

来栖は彼を追い込み、情報を聞き出そうと企んでいるに違いない。

「なんの話がしたい?」

不本意でありながら、明智はとりあえず話を聞いてみる。

「わかんない、でも、この前私と話すのは楽しいって言ってたよね。」

「それは、確かに言っただけど……」

明智は認めざるを得なかった。確かに、そんなことを言ったことがある。しかも、何回も言ったことがある。来栖との関係は今一でありながら、彼女と話するのは確かに楽しい。

「でも、なかなか明智君と会えないから、いつになったらまた話せるかな、なんてずっと考えてた。だから、受付であなたを見かけたとき、このチャンスを利用してはならないと思った。部屋を共有することになったから、時間はたっぷりあるし、今回はいろいろお話ができる。じゃ、早速、話ししよ。」

怪しいな。事態が取り返しつかなくなる前に、話の流れを抑えないといけない、と明智は思った。できれば、来栖に口を滑らせて、怪盗団の一員であると認めてもらうことができるなら一番だ。しかし、彼女の言う通り、部屋を共有することで、来栖と付き合う時間は普段より何倍も長くなる。追い詰めすぎて、彼女の気を悪くするのもよくない。

「明智君はなんでここに来たの?」

明智がなかなか話さないから、来栖が話を切り出す。

「事件を調べに来たよ。このあたりに手がかりがありそうで、そのため、何日かこつちに滞在しないといけないんだ。来栖さんはなぜここに?」

後が付かれてないといいけど。

「授業だよ。今日は一日目、とつても面白かった!」

「へえー、でも今日は学校があるはずじゃないの?うちの学校は、上位の成績を保つ代わり、学校の日には探偵仕事をするという許可をしてくれたけど。来栖さんも学校から許可してくれたの?それとも、もともと学校が主催した授業だった?」

「ううん、学校とは関係ないよ。実際うちの学校今は修学旅行中なんだ。でも、何か月前からこのコースを応募したし、今更取り消すのがもつたいなくて。学校に修学旅行を欠席するとの申請を出した。」

明智は心から目の前の少女を尊敬した。

「あらかじめ授業を申請して、そのため修学旅行までやめることにしたなんて。来栖さんは偉いね。」

「自分から勉強したいと、ほかの人に勉強させられるとはだいぶ違うからね。」

明智はよく勉強に時間を分ける。しかし、それは決して何かを知りたいというわけで

はない。無理やりでも色々な知識を身に着けるのは主に話題づくりのため、あるいは、ほかの人に自分が博識であることをアピールするためである。

「確かに。」

明智が適当に答える。無言な時間が続き、二人はお互いを見つめることしかできなかった。そこで明智は腹をくぐって、怪盗団の話を持ち出すことにする。

「来栖さん、怪盗お願いチャンネルのランキングを見た？」

そのようなことを口にした明智は何かを思いついたような顔をして、直ぐ言い直した。

「あ、バカな質問だったね、来栖さんなら当然……」

「ランキング？」

明智の話は来栖に割り込まれた。

「ランキングって何のこと？」

「えっ、まだ見てないの？」

そんなことがあるか。もし来栖が本当に怪盗団の一員であるなら、彼女は常に怪チャンをチェックしているはずだ。

「まだだよ。最近、こっちに来るための準備と授業で忙しかったから。」

「そうなんだ。実はね、最近怪盗お願いチャンネルにだれを次のターゲットにするかの



投票が挙げられた。」

明智が説明する。

「投票の結果、奥村さんが一位になった。」

「それ、誰？」

とぼけているの。とそう聞きたいけど、明智はそれを我慢した。「奥村邦和さんだよ。株式会社奥村フーズの社長。ビッグバンバーガーも奥村フーズのブランドなんだ。」

「へえー、何で奥村さんをターゲットにしたいの？」

怪盗団に奥村を狙わせなければならぬ。それが罫を実施するための一番大事なこと。

「彼の会社は高速に発展している、それに多数の噂話が伴っている。従業員を酷使することで人工費削るとか、競合他社が都合よく消えて、そのすきに発展したとか。」

「都合よく消えた？それってどういう意味？」

あまり説明する気になれないけど、これは説明しないと無理そうだ。

「奥村フーズの競合他社はみんな精神暴走事件に巻き込まれた。次々と営業に影響を及ぼすほどの不祥事が起來たみたい。例えば、ワイルドダックバーガー。他にも食品業界に関わる役員が廃人化により他界したとか。どう見ても奥村フーズばかり得しているね。」

来栖は目を丸くした。

「まさか、精神暴走事件も廃人化も仕組まれていたと言いたいの？」

「そうでないと、説明がつかないよ。そこで僕は思いついたんだ。怪盗団の改心行為も仕組まれたものに違いない。それって、精神崩壊事件と改心の本質は同じものを意味していることになるんじゃないかな。」

頷く明智はこの話で来栖を煽り、彼女に口を滑らせるつもりだ。

「ええ？まさか、精神崩壊の一連の事件を引き起こしているのは怪盗団とでも言いたいのか？」

「そんなこと言っていないよ。でもあり得ないことじゃない。だから、この可能性を無視しちやいけないと思う。もし、これは本当に怪盗団の仕業だとすると、彼らは僕たちが思った以上に危険な集団になるね。」

来栖の頭が回っている声が聞こえるような気がする。その表情が険しくなり、いつもの冷静さも消えかけている。今度こそ、尻尾を挿んだと明智は思った。

来栖は無言のままスマホをタップしている。どんどん力を増している指先から彼女の怒りが伝わる。

「言語道断！」

と来栖は叫ぶ。明智はまた彼女の声に驚かされた。

「今怪ちゃんを見ているけど、バカな話ばっかり。好き放題言うし、公衆の熱意が冷める前に、さっさと次のターゲットをやっちゃえとかを言っている人もいる。これは見世物じゃないのよ！何それ、自分と関係ないことなら、別に何が起こっても楽しいわけわ、読むだけで、気持ちが悪くなってきた。」

そういうながら、彼女は携帯をしまう。

「公衆ってそういうものだよ。人気があるものに付いていき、簡単に立場をひっくり返す。いつも味方に付く保証なんてどこにもない。今日は応援していても、明日になって急に下げますようなことを言ってもおかしくない。僕もそうじゃないか、昔はあんなに人気だったのに、怪盗団がメジエドをやったから、すっかり嫌われ者になった。ラッキングを見ただろ？気づいたかな、僕の名前も載ってるよ。」

「言わせておけばいい、どのみち私達が何かできるわけじゃないし、そんなことを気にするほうが損だよ。」

「ありがとう。」

どのみち、来栖も自分のことが嫌いで、お世辞でこんなことを言っているだろうけど。「でも、本当に怪盗団に狙われてもいいことかもしれない、面白いし、彼らの改心方法を見抜けるかもしれない。」

「明智君を狙いに来ると思う？」

「多分狙われるんじゃないかな。」

「なんでそう思うの?」

「今のところ、名を挙げられた人の中で、一番有名なのは僕なんだ。奥村がやってたように、反対勢力を消去するような真似をするのもおかしくない。精神崩壊と改心事件が本当に何等かのつながりを持っていて、それを引き起こしているのは怪盗団であるなら、僕を狙わないほうがおかしいと思う。」

「どうやら、来栖はよほど精神崩壊事件を怪盗団のせいにされたくない。「私達はそんなことをしていない。」などの言葉を叫ぼうとする気持ちを必死に堪えている顔をしている。」

来栖は深くため息をついて、冷静を取り戻そうとする。

「明智君、あなたの探偵としての能力を疑ってないけど。この推論が外していると思いたい。私から見ると、怪盗団は私達みたいに、腐っている大人に虐待されて、社会的に公平を受けている人の希望だよ。だから、怪盗団はそんな恐ろしいことをやっていないと信じたい。」

また誤魔化している。来栖は知らないふりをしている、それとも本当に怪盗団のことについて何もわからない。明智は一瞬自分の推測を疑った。ほんの一瞬だけ、来栖は怪盗団の一員であるはずがないと思った。

明智は無理やりに笑顔を作った。

「そうだといいけど。間違いを指摘されるのは好きじゃないけど、この推測が間違いだと言われるのは悪くないと思う。怪盗団は正義の味方、それを悪く思ったのはあくまで僕の偏見であるなら、僕もこの腐った世界に少し希望を抱くことができるだろう。」

\*\*\*

明智の言葉に潜んでいる苦しさで晶の心が痛む。

「この世界に希望がないと思ってるの？それは、悪いことはあるかもしれないけど、いいこともたくさんあるよ。」

いつものセレブ仮面が消えたように、明智は嘲笑う。

「明智君？」

しかし、明智は顔を背けて、彼女の問いに答えようとしなない。

「わかった。どのような経緯でこのように考えるようになったのがわからない、話したくないなら、無理に話そうとしなくてもいい。でも、話したくなったら、私いつでも聞くから。」

明智が何を言おうとしているみたいけど、結局何も言えなかった。恐らく何か痛い所突かれただろう、しかしまだその話ができるほど、明智は晶を信用していない。

「とりあえず一人にさせておくよ。私先にシャワー使うね。」

そう言つて、晶は自分のベッドから立ち上がり、部屋から去る。今は明智を一人にさせてあげたほうがいいだろう。

\*\*\*

一人になつた明智は考え始めた。別に怪盗団のことを嫌つてゐるわけではない。彼らの行動によりいい結果が持ち出されてゐるのも間違いない。しかし、彼らは精神崩壊事件のこれ以上ない身代わりである。廃人化の罪を彼らに擦り付けることで、獅童は公衆の信頼を得て、この国の頂点に立つ。それで、明智はようやく自分の復讐計画を実施することができるようになる。もし何年前に、明智があつた謎の存在からペルソナの力を授かる前に、明智が獅童に接触する前に、明智が、取り返しつかない道を歩み始める前に、怪盗団が現れていたら、このようなことにはならなかつたのだろう。だとすると、彼にもはまだ明るい未来が待つていたかもしれない。

しかし、そんな都合のいい話なんて存在しない。現実残酷だ。明智の人生はもうめちゃくちゃになつてゐる、元に戻そうとしてもできない。もう、どうしようもできない。最初いくら獅童の命令であるとはいへ、明智は殺人なんかしたくなかつた。でも、反抗すると、殺されるかもしれない。そう思いながら、明智は彼の言うことを全部従うことにした。それは復讐するための唯一の方法だつたから。

ここまで、明智は被害者たちが全員自業自得だと自分に言い聞かせつつ、任務を遂行

してきた。彼らはこの「食わないと、食われる」というゲームのプレイヤーで、みんな腐った、力に飢えたくそ野郎だ。でも、実際明智はわかっていた、そんなの言い訳に過ぎない。彼はこれまで多数な被害を引きおこした、それは悪いことを自覚しているからこそ、そのような見苦しい言い訳を言い続けてきた。今更引き返すなんてできない。隠し子として、必要とされていらない子供として生まれたから、彼に明るい未来なんかいいことは定められた。獅童の命を受けた瞬間から、明智は穏やかな生活を過ごす最後の可能性を捨てた。今更もう失うことなんかない、復讐するためだけに生きてきた。復讐をするため、獅童の命令を聞くしかない。

来栖がシャワーから出た途端、明智が中に入る。シャワーをした後、二人でホテルのレストランに晩御飯を食べに行く。来栖の邪魔をしないよう、明智が念入りに彼女と距離を取っている。

\*\*\*

ばんばんと詰めた皿を持って、晶は明智を探す。明智は離れている6席テーブルに座り、一人でご飯を食べている。明智は部屋で話した時からずっと変だった。きつと、先の話のせいだろう。どうにか謝らないと。

晶は明智のテーブルまで歩き、声をかける。

「明智君。」

「や、やあ。」

隣の晶を気付き、明智は聞く。

「何？」

「明智君、怒ってる？」

明智は困惑な顔を見せる。

「そんなことないよ。なぜそう思うの？」

「だって、ずっと私を避けてたじゃない。」

礼儀よく頭を横に振った明智は言い出す。

「まさかそう思われるとは、誤解を招いてごめん。そういうつもりじゃないんだ。少し考え事をしてただけ。それに、来栖さんの邪魔をしちゃ悪いし。部屋を共有する件ですでに迷惑をかけているから。」

晶はお箸を手にして、気にしてないことを表すみたいに手を振る。

「全然邪魔じゃないよ。そもそも迷惑だと思ってるなら、部屋を共有する話を持ち出すなんかしないよ。正直に言うよ、ここに来たデメリツトの一つは友達と離れ離れになって、一人で過ごさないといけないこと。真正正銘の離れ離れ、向こうはハワイにいるし。ここで知り合いと偶然会ってうれしいよ。ごはんに同席してくれる人がいて、いいことじゃない？あ、一人で食事をしたいと言うなら、私これで失礼するけど。」



明智は手を挙げて説明する。

「そういうわけじゃ……僕は一人で食事を好んでいるわけじゃない。同席する人がいるのは慣れていないだけだ。仕事がらみで、晩御飯を一緒にすることはあるけど、あくまで仕事の話しかしない。同年代の人と付き合うのはあまりなくて、一緒に出掛けるのもかなりレアケースだ。来栖さんが同席したいというなら、どうぞ、座って。椅子ならいっぱいあるよ。」

素晴らしいながら、周りの空席をさし指す。

「ありがとう。」

晶は微笑みながら明智の隣の椅子に腰を掛けた。回りくどいが嫌いな彼女のことだから、さっそく話を切り出す。

「明智君、先はごめんね。」

「先って、何のこと？」

「先の話のこと、気に障ったよね、本当ごめん。」

明智は頭を振る。

「謝る必要なんてないよ。話を持ち出したのは僕だし。」

そういつて彼は目を下に向く。

「君みたいに楽観的になりたいな。」

と言い出した。晶はその後ろの言葉が気になって、黙ったまま待ってた。それで、数秒後、彼はまた口を開く。

「居候している家庭で転々としてたころ、いろいろあつてね。あまりいいことはなかったよ。今の来栖さんの状況や、立ち向かっている困難はわからないけど、それもさぞ辛いことだろう。」

「なんの話？」

明智は何を言っているかさっぱりわからない。

「じ、実は……」

明智は晶の耳元でささやく。

「来栖さんは、保護観察期間中だよね。ご、ごめん、君の過去を調べた、詮索見たいな真似をして。」

「そうか。」

晶はそれしか言えなかった。そういえば、明智は彼女と彼女の友達が怪盗団であると疑ってたんだっけ。調べても無理はない。彼は探偵だもの。疑ったら、個人情報調べるのも仕方がないよね。

「傷害罪だったよね。何をした？」

明智はさらに追究する。

「何々、私の黒歴史を知りたいわけ、探偵さん？それとも、部屋を共有したことに後悔してる。」

晶は肩をすくむ。

「正直、私は傷害罪を犯すような人だと思う？」

「思わないからこそ聞きたい。僕から見ると、その事件の裁決はおかしい。」

「教えてあげても別にいいけど、信じるかどうかはあなた次第だよ。」

「聞かせて。」

励むように頷く明智を見て、晶は嫌がらせを受けていた女性を助けようとした結果、人生に破滅が迎えたことを語った。

「その女性を脅し、君に罪を擦り付けた？」

晶の予想と違い、明智は冷静に晶の話聞き、分析を行うようなことをしなかった。彼の目に怒りの炎が燃えていて、歯を食いしばった。

「そうだよ、信じるかどうかはあなた次第だけ。」

「信じるよ。証拠はないから、君が話を誇張しているかどうかは判断できない。でも、それは決してあり得ない話じゃない。向こうは匿名だし、その人はさぞ権力者に間違いな  
い。それはだれかわかるか。」

「わからない。」

晶は頭を横に振る。

「暗かったし、顔も覚えてない。事件のショックで、あの日のことをはつきり覚えてない。知っているのは、あの人が酔っ払っていて、私が女の子であることすら気づいてないことくらい。でも、そのほうが良かったかも、私が女の子と知ったら、何をしてくるかかわからないし。」

そんな結果を考え、明智がぞつとした。少しぎこちなく肩をすくむ。

「ごめん、今笑うところだった？」

「私もわからない、でも滑稽極めの話だったのは間違いない、だから笑いたければ、笑っているよ。」

「そんな、来栖さんの過去を笑うつもりはない。」

明智は一瞬黙り込む。

「そのあと、君はどうしたの？」

しかし、すぐにその言葉を取り消したいと思ったようだ。

「ごめん、それは個人的な問題だったね。」

「別にそんなことないよ。」

晶は全然気にしていない。

「何をするべきかわからなかった。前の学校で犯罪者として扱われて、退学になったし。」

本当は人生がこのまま終わるかと思った。私は、今まで必死に頑張つて、勉強して、教われた理に従つて生きてきた。私は何の悪いこともしてない、毎日より優れている人間になれるように努力した。でも、その夜、すべてが変わつた。私の人生が悪い方向に下り、これまで築いた名声は一瞬で崩壊した。そのため、私は未来に恐怖を抱いた。何をすれば自分の身の潔白を証明できるかわからないし、証明できたとしても、また失うことになるかもしれない。両親が私のことを信じて、応援してくれるから、諦めずに頑張りに続ける。その結果、秀尽学園に受け入れられて、ここまで引越してきた。両親は仕事があるから一緒に来られないけど、私を応援してる気持ちは変わらない。」

明智は彼女を初めて見えたように、晶を見つめる

「来栖さん、君は尊敬に値する人だ。不公平な待遇を受けたとはいえ、君は樂觀的な性格を変えていない。いつも元気な顔をしている。君を見て、あのような経歴があつたなんて想像もできない、犯罪者として扱われているのも全然思いつかない。」

「それはお互い様じゃないの、セレブさん。ルブランでああなたの過去の話を聞くまで、あんなことがあつたなんて、思いもしなかつた。」

明智は肩をすくみ、言い出す。

「正直、君にあんなことを言うつもりはなかつた。僕の過去を知つたら、ほかの人と同じように僕のことを蔑むと思つた。しかし、気づかないうちに、君にすべてを伝えた。」

「お互い苦勞したよね。でも、その話を聞けて良かったと思ってる。明智君って、簡単に信頼を他人に託すような人じゃなさそうだから。」

「それは間違いないよ。僕はなかなか他人を信用しない。うまく言えないけど、君の前じゃ、ついいろいろ話したくなる。」

「普段の生活に戻ったら、有名人の高校生探偵も私と同じ除け者だなんて、誰も思わないでしょう。他人に素性を決めつけられるのは辛いことぐらい、私もよく知ってる。だから、話したくなったら、いつでも聞くよう。私、絶対そんなことしないから。」

「ありがとう、晶。」

「えっ……」

晶はかなり驚いた。

「今、私の名前を呼んだよね。」

明智はびくつとした、これでもう会ったからの三回目だよ。

「ご、ごめん、来栖さん。」

とすぐに正した。

「晶でいいよ。私の友達みんなそう呼ぶから、でも、まさかこんなに早くあなたの口からそれをきくとは思わなかった。」

\*\*\*

なんでそんな簡単にこんなことを言えるだろう。

「いいえ、でも、僕は……」

と反論しようとする明智。

「私の友達じゃない、と言いたいのか？」

晶は彼が言いそびれた話を口に出す。

その話には明智は頷く。

「今はまだ友達じゃないかもしれないけど。私の友達になりたい？」

どう答えればいいだろう。明智に友達なんかいない。誰も彼の友達になりたくなかった。本当の友情ってどんなものはわからないけど。それは特殊なもので、誰かに強いられた、見た目だけのものではないのははっきりわかっている。

「それは、素晴らしいね。でも僕たちって、本当に友達になれるのかな？だって、友情って自然に生まれるものじゃないの？」

「確かに、意見統一できないことはあるけど、今まで私達はそれなりに仲良くやっつけてるじゃない。これからも仲良くして、友達になれると私は信じてるよ。そう思わない？」

残念だけど、そんなに簡単な話ではない。まだ認知世界のことがある。晶に自分がやったことを知られたら、憎まれるに違いない。やはり、彼女とあまり親しくしないほうがいい。でも……

「そう思う、と言っているような顔をしているよ。」

晶が明智の腕に置いた手は彼をびっくりさせた。

「今日驚きやすいね、これで四回目だよ。」

「か、数えていたんだ。」

恥ずかしさを隠そうとし、明智は顔を下に向く。

「それはどうでもいいだろう。と、友達になれるというのは嬉しいけど、でも……」

「じゃ、試みる価値があるね。少しずつやってみよう。まずは、私を晶で呼ぶこと。その  
ほうで呼ばれるのが好き。堅苦しくないから。」

「じゃ……」

一瞬、彼女に自分を「吾郎」で呼んでもらうことを思った。でも、それをやめること  
にした。母の死後、彼を「吾郎」と呼ぶ人はいなかった。みんな、「明智吾郎」あるいは  
「明智」で彼を呼ぶ。今になって、逆に「吾郎」と呼ばれるのは違和感を持つ。(まだ)友  
達ではない人に、そう呼ばれるのは、さすがに馴れ馴れしいと思われる。

「わかった、晶。」

と明智は答えた。

「よし。」

晶は嬉しそうに彼に笑う。



「物覚えがいいね。」

「それは僕の取り柄だから。」

明智は少し自慢する。

「凄い自己顕示欲。」

そういうしながら、晶は軽く明智を肘で突き、彼をもう一度驚かす。

「五回目だね、これも少しずつ慣れないと。」

「そうだね……」

ごはんを済ませたから明智は晶と一緒に部屋へ戻る。晶はテレビをつけたけど、あまり面白い番組が放送されていない。チャンネルを変えて、映画を少し見ようとしたんだけど、よさそうなものはない。小さくあくびをする晶を見て、退屈な映画で時間を潰すより寝るほうがいい、と二人は決意した。

「ね、明智君、お休みのキスが欲しい。」

と晶は急に言い出す。

「えっ?」

「お休みのキスが欲しい。」

と彼女はもう一度言う。

「それは聞いたけど。」

「だから、明智君に……」

「ぼ、僕！」

明智が目を丸くする。

「どうして、僕に……」

「ほかに誰もいないじゃない。」

当たり前のように彼女は言う。

「で、でも、さすがにそれはだめだろう。」

「頬での軽いお休みのキスだよ。それだけ。何の不思議でもないし、何も悪くない。」

「そう言われても……」

「お願い。」

と言い張る晶。

「っ……」

その願いを無視しようとしているけど、どうやら晶はあきらめる気がない。

「本当、お願い。」

明智は頑張って、そのお願いと書いているかわいらしい顔に負けないように言う。

「晶、ごめん、でも……」

「明智君、これから私と友達になるよね、だから、私のやり方に慣れてこないと。これも

そのためだから。」

明智は黙りこんだ。しかし晶はまだ彼を見ている。期待に溢れている目、そんな彼女を悲しませたくない。彼女は常に笑っている、悲しい顔なんて、彼女に似合わない。それに、これは彼女の提案だ。キスをして、責められるようなことはないだろう。

「わかった。」

深くため息をつき、明智は立ち上がり、ゆっくり晶のベッドに歩きだす。深呼吸をし、躊躇いながら二人の間の距離を詰める。自分の唇で晶の華奢な頬に恐れ多く触れる。そのあと彼は何か間違ったことをしたように、すぐに離れ、自分のベッドに戻ろうとする。

その恥ずかしさが足りていないように、晶は爆笑する。

「まさか、本当にやるなんて！」

「えっ。」

そこで、明智は気づいた。さっきのことは晶の冗談に過ぎないということ。もういつそどっかに自分を埋めたい気分。

「あー、もう、やるべきじゃなかったな、僕をからかっているよね。」

晶の笑いは少し収まった。

「からかうより、試しかな。正直やると思わなかったよ。でも、お休みのキスしてくれた

し、本当、かわいかったからね。でも、これだとすると不公平になるよね。」

晶がそう言いながら立ち上がる。

「大丈夫、一人で恥ずかしい目に合わせないから。」

それで、彼女は明智のベッドに向かい歩き出す。

明智は恐怖で目を丸くする。

「晶、ちよつと待って。」

でも、彼女は聞く耳を持たなかった。明智のすぐ隣まで来て、逃げようとした明智より早いスピードで、軽く彼の頬にキスする。それに含まれているいとしさやさしさは明智にとつて身に余っているものだった。明智はその場で固まり、心臓が急速に跳ね上がる。

「これで、貸し借りなし。」

何か言おうとする明智は声すら出なかった。

「お休み。」

晶は優しく笑いながら、自分のベッドに戻る。眼鏡をベッドサイドテーブルに置き、電気を消す。

ようやく動きを取り戻した明智はベッドに戻る。

「晶。」

「何？」

「先ので、僕が小さいころ、母がよくしてくれたことを思い出させてくれた。」

「へえ。」

「外国の映画でお休みのキスを見て、母に頼んで、やつてもらった。」

晶は笑いだす。

「ああ、絶対かわいかっただろうな。でも、温かい記憶でしょう。」

「そうだ、温かい記憶だ。」

子供の頃の記憶、その時の彼は純粹な心を持ち、何の過ちも犯していなかった。母のお休みのキスは、彼を早く寝かせる方法の一つであり、遊びをやめ、おとなしく戻って寝る。母のキスは優しく、懐かしかった。晶のキスも優しい、でもどこかが違っていい。なぜかわからないけど、それは彼をドキドキさせる。実は、今になっても、ドキドキが止まらない。

「恥ずかしいことをさせて、ごめんね。」

晶はそう謝る。

「でもいい記憶を思い出させたなら、良かった。」

「いいえ、大丈夫だよ。ありがとう。」

明智はそれ以上何を言うべきかわからなかった。さきのキスは少し恥ずかしいもの

ではあったが、なぜか明智は一瞬こう思った。もう一度お休みのキスをされてもいいと。

## 第二章 二日目

九月十日 土曜日

予定通り、明智は認知世界に向かう。今回の命令は秀尽学園の校長のシャドウを消すこと。パレスはこの辺りの彼が所有している不動産にある。しかし、明智に予想できなかったことが起こった。どうも今日の調子が悪い、基本的なミスをするし、その上、普段より何倍も待ち伏せされる、その結果パレスの警戒度は上がる一方。なぜだ？それは、昨夜晶とのでき事が頭から離れないからだ。過去や考えの違いと関係なく、普通に彼と接した。友達すらなろうとしてくれた。突拍子もない話をして、彼を混乱させるけど、同時に彼を安心させる。それと、彼女のキス。彼女の優しいキスは明智を宙に浮いている気分させた。

シャドウは明智の不注意に付けないわけがない。隙をつき異常状態をかけ、次々にリテイカルヒットを出し続ける。目眩、忘却、混乱、異常状態は時間の経過につれ治るが、一斉にこれだけかかると、さすが明智の気持ちも本気で悪くなってくる。頭がガンガンしている。この警戒度じゃ進むのは難しい。今日中でパレスをクリアするのは無理かもしれない。いったん帰るしかないみたい。

午後五時、明智はホテルの部屋に戻った。まだ頭痛する。シャワーを浴びて、頭をすつきりしようとするが、効果なし。

一度寝て起きるとある程度治るのではないかと思い、寝ようとするが、頭痛の影響で眠気が全然しない。

もうどうしようもできなくなり、明智はホテルに一番近いクリニックに尋ね、鎮痛剤でも貰いたいと思う。当然でありながら、お医者さんは彼の頭痛の原因を定めることができず、それがストレスによるものとしか言えなかった。結果、明智は勧められた薬をもらい、ホテルに戻った。

鎮痛剤のおかげで、頭痛はだんだん収まって来て、宿題できるくらいまで回復したと思う明智は、問題に専念する。しかし、それとほぼ同時に、眠気が襲い始め、目を開けることすら困難になり、思考もどんどん鈍くなる。

\*\*\*

二日の授業が終わり、ホテルに戻った晶が見えたのは、鉛筆とノートを手にして、ベッドに座り込んだ明智である。

「ただいま。」

と晶は挨拶する。

「うん。」



明智はぼんやりと答え、背を伸ばし、疲れ切った顔で晶のほうを見る。

「明智君、大丈夫？」

何かがおかしい、そう思い、晶はどうしても気になって、聞いてみた。

「え？ああ、大丈夫だよ。先少し頭痛して、でも薬を飲んだからもう大分楽になったよ。」

「そうか。」

その薬に眠気の副作用があるに違いない。

「何してるの？」

「宿題、上位の成績を保たないと。」

「わかった、私シャワー浴びてくるから、すぐ戻るね。」

明智は頷き、宿題に専念する。

晶がシャワーから帰ってきた時、明智はまだノートと鉛筆を手をしている。しかし、頭がもうすっかりノートにつき、目が閉じていて、手も全然動いていない。

「明智君。」

そう言いながら、晶は明智の肩を軽く叩く。

「やめたほうがいいよ。」

「だめだ。」

明智は頭を挙げて答える。目を半開きして、もう一度ノートを見つめようとするが、

手がまだ動いていない。

「ちよつと失礼。」

なんの抵抗もなく、晶はノートを明智の手から取る。

「君にわからないよ、これは三年生の問題だ。」

彼の声がひどく引きずっている。

そういわれているが、晶は彼のノートをチェックする。

「使つてる公式がわからなくても、ここの計算が間違つてることぐらいわかるよ。今は数学問題ができる状態じゃないと思うけど。」

「数学じゃない、物理だ。」

眠そうとは言え、自慢げに答える明智。

晶は笑いを必死に堪えようとするが、それに失敗する。

「とにかく、今の計算は明らかに間違つてる、これだといひ成績を保てるとは言えないと思うけど。少し体調調治したからやるほうがいいよ。」

「僕は大丈夫。」

明智はあくまで言い張る、明らかに大丈夫ではないのに。

「大丈夫じゃない、休んだほうがいいよ。」

「疲れてない。」

そんな言い方じゃ、信じたほうがバカだ。

晶はため息をつく。

「探偵君って、頑固だね。」

「お互い様だろう。」

と明智は言い返す。

悪ふざけをするように、晶は舌を出す。驚くことに、明智も同じく、舌を出すことで返事をする。それを見て、晶は爆笑し始める。普段人の前で礼儀正しい明智は、通常このような顔をするはずがない。一体どのような副作用であるかははっきりしてないが、明智を深く影響していることに違いない、彼にその礼儀正しいマスクをはがせた。

「やめてよ。」

爆笑する晶を見て機嫌損ねたように、明智が言う。

「ごめん。」

ようやく笑いが収まった晶が言う。

「返せ。」

探偵の目は晶がノートを持っている手に向く。

「いやだ。」

と晶が断る。

明智はノートを取ろうと手を伸ばすが、ぼんやりとした状態で、反応が遅くなり、晶が簡単に彼の手を避ける。もう一度試そうとすると、今回は手に持っていた鉛筆も落とす。鉛筆は彼の手から落ち、ベッドから地面に転がる。明智はゆっくりと座ったまま鉛筆を拾おうとするが、その気力すら残っていないみたいため、あきらめる。

晶は鉛筆を拾い、明智は期待な目で彼女を見る。

「返してあげる気はないよ。ほしいなら、取りに来てね。」

晶はノートと鉛筆を自分のベッドサイドテーブルに置く。この距離だと、明智の位置から届くはずがない。

明智は不満そうにぶつぶつと言いながらあきらめる。

晶は自分のベッドサイドテーブルの隣に立つ。

「ほら、休んで、晩御飯の時間に起こすから。」

「眠くない。」

口ではそう言っているが、実際明智は目を開けることすらできない。動きが鈍いいうえ、声すらまともに出ない。

「はいはい。」

晶の口調は皮肉だった。誰が見ても、明智は寝る寸前見たいな顔をしている。

「じゃ、何かしたいことがある。」

眠いとは言え、明智は晶の議論を一つ一つうまく反論してきている。それに感服しているが、ここで論破されては困る、そのため、晶は一言を加える。

「当然勉強以外のことだけだ。」

明智は反論する余地が残されていないことを気付くまで少しかかる。何にも喋らずに、開けることすら困難な目で晶を見つめるしかできない、まるで、自分が眠くないと証明しようとしている。そして、彼は立ち上がり、歩き出す。

「ちよ、何をしてる。」

晶は慌てて明智のもとへ向かう。何かにつまずいて転んだら大変なことになる。

明智は彼女の後ろに回って。

「え？明智君、何を？」

振り向かおうとする晶の眼鏡は明智にとられた。

「ちよつと、返してよ。」

「い、や、だ。」

先、晶が言ったように明智は言う。

動きが鈍くなっている明智から眼鏡を取り戻すことは簡単。しかし、このままにする  
と彼女は決めた。これで明智を喜ばせることができるなら、別に眼鏡が取れるくらい  
で、困ったりしない。相手に勝利を味わわせることも、また怪盗にふさわしい作戦であ

る。

彼女の作戦はうまくいったようだ。明智は眼鏡をベッドサイドテーブルに置き、誇らしげに北叟笑む。

「参った。」

晶はため息をつき自分の負けを認める。

「探偵君に一本取られたね。」

これは明智を説得させたようだ。彼は誇らしそうに笑い、再び彼女に舌を出す。

自分の勝負欲を必死に抑え、晶は元々手にした勝利を手放す。同時に、ありのままの明智の可愛さに叫ばないよう注意する。元に戻ったら、明智はこの出来事を思い出せるのかな、またこのような明智を見えることができるのかな。

「もう喧嘩はやめよう。君との関係を悪くしたくないから、仲直りしよう。」

晶が提案する。

「取引しない？ノートと鉛筆を返してあげるから、眼鏡を返して。それでいい？」

少し考えて、明智は頷く。二人はそれぞれのベッドサイドテーブルからものを取り、近づく。でも、明智はものを受け取ることも、眼鏡を渡すこともしない。彼は、眼鏡を両手にして、晶の鼻にかけようとしている。

晶はたまらずに笑いだす。

「明智君、メガネが逆様になつてるよ。」

ぼんやりとしている探偵は恥ずかしそうに動きを止め、眼鏡をひっくり返して、もう一度晶の鼻にかけようとする。真顔で眼鏡を晶にかけようとする明智が可愛すぎて、ほえましい。結果、手間をかけたとはいえ、晶の眼鏡は無事に元の場所に戻った。

「オー、明智君は優しいね、ありがとう。」

晶はノートを腕に持ち、手を伸ばし、明智の頭に軽くポンポンする。

「これは明智君のもの、返してあげるね。」

明智は自分のノートをベッドサイドテーブルに置き、やっと自分が勉強できる状態ではないことを認識したようだ。彼は疲れ切つてようにベッドに座り込む。

「少しくらい寝よう。」

晶は明智に言う、そんなことを聞いて、彼はまた不満そうな顔をする。

「もう、寝るたびにこんなに手間をかけると、モルガナと絶対うまくいかないね。あ、モルガナつてうちの猫だよ。夜更かしするたびにうるさくて。」

明智は笑いだし、ちゃんと話を聞いていることを示す。

「明智君、とりあえず私がメールをチェックしてる間、少し休んで。終わったら起こすから、それで一緒に晩御飯を食べよう。」

機嫌悪そうであるが、明智は横になる。しかし、彼は表情を歪ませ、手で頭を押さえ、

うなり声を出す。

「また頭痛？」

晶は彼のベッドの隣まで歩く。

何もなかったように装い、明智は手を下ろす。

「大丈夫。」

そのような言葉を信じるはずがない。晶は手を伸ばし、軽く明智の頭をなでる。

「やめろ。」

明智は弱弱しい声で抗議する。

「え？」

晶は自分の行為が彼の辛さを増したと心配し、手を止まる。

「自分のことをやればいいじゃない。そのため僕を寝かせるつもりだったんじゃないのか。僕が邪魔だから。」

「な！」

自分の耳を疑うほど驚いた。

「どうしてそうなるの。そんなこと言ってないでしょう。」

明智は嘲笑う。

「言わなくても、そう考えているだろ。」



「違う。私はただ、自分のことをしている間、明智君が少し休んだほうがいいといっただけで。」

明智は疑っている目で晶を見る。しかし、数秒後、彼は目を閉じ、疲れたようにため息をつく。

「僕のことを気にするな、やりたいことをやればいい。」

若い探偵の反応に困惑を持ち、晶は反省する。自分が何か彼をそう思わせることを言ったかな。彼を少し楽にさせたいだけなのに。晶は明智の抗議を無視し、彼の頭をなで続ける。今回明智は疲れ切っているようで、もう反論する気力すら残っていないみたい。それで、間もなく、明智は眠りについた。

晶は自分のベッドへ戻り、スマホを取り出す。まずは双葉とモルガナの連絡をチェックし、そのあと、ハワイにいる友達からもらったメールを目を通す。時差の影響で、SNSの代わりに、メールを使っている。これは真の提案だ。竜司の話によると、別に残念がることはなさそう、ハワイに行っても、やっていることは日本にいる頃とはそう変っていない。ごはんも一緒にビッグバンバーガーで取っている。そういえば、昨夜明智と怪チャンのランキングと奥村フーズの社長の話をしている時、確かにこの名前が出てきた。でもこの話をするには、友達がハワイから戻ってからにしよう。晶はもらったメールをいちいち返事して、スマホをしまう。

明智が寝てから15分くらいがたった、しかし、今はまだ休ませたほうがいいと思って、晶はもう少し待つことにする。ニュースをチェックして、スマホゲームを20分ほどしてから、明智を起こそうと、彼のベッドに向かう。

「明智君。」

晶は軽く明智の肩をたたく。

寝返りしながら、明智は眠そうに瞬きする。彼は晶を見つめ、笑う。いつもテレビで装っていた笑いではなく、純粹で、自然な笑顔。

晶は微笑みながら言い出す。

「大丈夫?」

明智はゆっくりと体を起こし、立ち上がる。彼は静かにうなずき、バスルームへ向かう。数分後明智は部屋に戻る。頭に冷たい水で被ったとはいえ、眠気がまだ冷ましていないようだ。

晶は心配そうに聞く。

「まだ頭痛するの?」

「もう大丈夫。」

明智は弱弱しい声で答える。

明智の目を見つめ、晶は聞く。

「本当？嘘言つてないようね。」

明智は彼女を見つめ、頷く。

「ならいい。」

今度こそ正直に答えているらしい、晶は微笑みながら聞く。

「一緒に晩御飯を食べに行かない？」

少し間を空いて明智は答える。

「いい、行く。」

彼の声はまだひどく引きずっている。

晶は心配している、明智は確かに少し前より状態がよくなっているとはいえ、その薬の副作用はまだ完全に消えていないみたい。

「本当？ここはんを部屋まで持って帰ることもできるよ。」

「行くよ。」

と彼は繰り返して言う。このような方法で意思を主張するつもりらしい。

「明智君がそういうなら、わかったよ。」

晶は明智の隣まで行き、彼の腕に手を置く。

「心配しないで、付いていくから。」

部屋を出た二人はエレベーターに向かい、そこで待つ。しかし、数分がたち、エレベー

ターが来る気配はしない。明智は立ったまま、眠りにつきそう。

「少しかかりそうだね。」

明智を眠らせないよう、晶は彼に声をかける。

「階段で行く?」

明智は聞く。

「だめ!」

それを聞き、晶は断固に反対する。

「転んだらどうするの?」

「転んだりしない。」

そう言い張っているとはいえ、こんな眠そうな顔をしているから、全く説得力がない。

「その可能性は否定できないじゃない。」

「なら、一人で階段で行く。」

なんて頑固な人。

「だめ、あなたは私と一緒にエレベーターを乗る。」

一人で階段で行かせるものか。

「一人でも大丈夫。ずっと一人だから、大丈夫だよ。」

目をそらし、明智は小さな声で言う。

いつもの礼儀正しい探偵ではなく、手を焼かせる子供みたいな明智はかわいい。しかし、彼は晶の手助けを頑固に断っている。絶対何かがある、しかし晶は彼の心を開く方法を知らない。

そのやり取りは開いていくエレベーターの扉より止められる。

「エレベーターが来たよ、これで問題解決だね。行こう。」

明智の腕をつかみ、晶はエレベーターに乗る。

エレベーターの中はかなり混んでいる。二人の少年少女の間はわずかな隙間しかない。短いのりとはいえ、明智は無意識的に体重を晶にあずかり、眠りに落ちそうにしている。

レストランで晶は二人分の食事を取り、明智のためにフォークを取る。さすがに、今の明智がお箸を使えるとは思えない。今日も、昨日と同じように、二人は同じテーブルで食事をとる。明智は眠そうな顔で晩御飯を食べ始める、若干遅く進んでいる以外、何の問題もなさそう。晶は自分の晩御飯を先に終わらせ、少し明智を待つことにする。

明智を付き添って部屋まで戻り、交代でバスルームで歯を磨く。

晶がバスルームから戻る時、明智は惨めな顔をして、俯いて自分のベッドに座っている。

「明智君、どうしたの？」

沈黙、やがて彼は口を開く。

「いつもそう。」

彼の声が低すぎて、聞き取るため晶は彼の隣まで歩くしかない。その話は晶にしているというより、独り言に近い。

「居候している時もそうだった。何をしても、どんなにいい子であっても、その家族の生活にとつては邪魔者で過ぎない。彼らの時間、金を無駄に消費する重荷で過ぎない。」

深くため息をつき、明智は続ける。

「部屋を共有するべきじゃなかった。今になって僕は君の生活も邪魔している。」

孤児や隠し子はよくつらい目にあう、そんなことくらい晶も知っている。しかし、明智が転々としていた生活を想像したことなんてなかった。今までの話により、どこに行っても歓迎されず、重荷として扱われているみたい。だから彼はいつも礼儀正しく人と接しているのか。人に自分がいい子であると認識させるにはそうするしかなかったのかな。

「そんな、邪魔なわけではないよ。実は今部屋を共有してよかったと思ってる。私がいなかったら、誰があなたの看病をするの？」

明智は一瞬に黙り込んだ。

「晶、何でそんな必死に僕を助けようとするの？」

「それに何か問題でもあるの。」

「実は単なるお世辞だったよね。」

「え？」

晶は明智に問いかける。

「お世辞？お世辞だけで部屋を共有するなんて言い出す人がいる！助けたいから言ったに決まってるでしょう。」

その一瞬、明智の顔は希望に照らされる。

「それって、君は僕のことを心配していると思っついていい？」

「当たり前じゃない。」

「ほ、本当？」

明智の声が震えている。

「でも、ありえない、誰も僕の心配なんつて……」

晶はやつとわかった、今の明智が子どもっぽい理由を。今ここにいるのは18歳の明智ではなく、捨てられ、心の奥に閉ざされた子供の明智だ。それは、誰にも目を向くすら思わなかった故、心の奥底に抑えられ、すべての辛いことを耐えた子供の感情だった。

「心配してるよ。」

晶はそう答える。

「彼らに何をされたか、教えてくれる?」

沈黙、晶は明智が答えてくれないと思つたときに、彼はやつと話し出す。

「施設で、頭数を増やすために残された。子供が増えると、国からの補助金も高くなる。年上の子にいじめられても、誰も助けてくれない。」

明智は辛そうに語る。

「血筋が大事にされている今の社会、隠し子はいつも蔑まされる。僕が隠し子だと知られるといつも嫌われてた。どうやら、悲惨な事故故に、孤児になつたことと、取り入れてくれる親戚が見つからないから施設に送られたのは違うみたい。新しい居候家庭に引越す度に、過去が知られ、蔑まされ、取り入れてくれたこと自体を後悔された。施設の補助金だけを目当てにする居候家庭があれば、ほかに行く当てがないから、無理やりに押しつかれた居候家庭もあつた。無視する家庭があれば、理由もなく殴りかかつてくる家庭もあつた。福祉施設にばれると、新しい家庭に送り出せ、それで過去が知られ、また同じパターンが始まる。何回繰り返したかは今になつてもう覚えていない。少しでも優しくしてもらえるため、僕はできるだけいい子にしてきた。少し効果はある、でも心配してくれる人なんていなかった。」

胸が締め付けられたように苦しい。なぜ明智に対してそんなに残酷なことをするのか?この頑固でありながら、可愛くて、優しい子になつてことする。補助金目当てで引き



取るなんて、冗談じゃない！こんな人達みんな改心するべきだ。彼はこの社会に絶望した、それは全部腐っている大人、とわけわからない福祉施設のせいだ。明智の過去は怪盗団のだれよりもつらい。トラウマになって、近づいてくる人はみんな何かを企んでいるように思うことになってしまった。だからほかの人を信用できない、だから彼女の助けを拒否する、だから自分で大丈夫と言い続ける。それを知り、晶はより彼を慰めたくなり、より彼を心配する。

明智は立ち上がり、躊躇しながら晶の隣へ向かう。

「本当に、僕のことを心配してくれるの？」

その声に期待があふれ出ている。

「本当だよ。」

晶は頷く。

晶は決意をする。彼女は一瞬で二人の間の距離を縮み、明智を抱きしめる。明智の目に光が灯した。彼は嬉しそうに笑い、腕を伸ばし、晶の腰に巻き、彼女を抱きしめる。その力が強くて、まるで晶は彼の命綱みたいだ。明智は今自分が何をしているかを理解しているかどうか晶にはわからない。元通りになると、今のことを思い出すかどうかともわからない。でも、今の明智は喜んでいて、それだけでいい。

明智はまた体重を晶に寄せる。薬の副作用がまた回ってきたみたい。彼は頭を晶の

肩に乗せる。

晶は手を伸ばし、ゆっくりと彼の髪をなでる。その動きは明智が動くまで続く。

「なんで？」

探偵は眠そうな顔で聞く。

「なんで、心配してくれるの？」

「う……、」

正直に言うのと、晶もわからない、そんな質問にまともな答えを持つている人がいるかな。

「わからない。探偵君、変なことを聞くね。私達は今話していて、私はあなたのことを少し理解してきて、あなたを大切に思うようになった。それくらいかな。」

「それだけ？」

何か面白いことを聞いたように明智が笑う。

「本当、君らしい答えだ。何でも簡単そうになる。つまり、これは自然に生み出した環状とでも言うのか？」

「そうよ、少しずつ友情を育つと約束したでしょう。」

「友情。」

明智はこの言葉を知らないように繰り返す。

「僕たちって、本当に……」

「友達になれる、って聞きたいの。当り前でしょう。」

でも明智は悲しそうにしている。

「君の心は純粹で、きれい。僕のとは大違いだ。」

「そんなこと言わないで。」

「それが事実だ。」

明智は低い声で言う。

「僕の心はめちやくちやだ。もし君が僕の心の中をのぞくことができたとしたら、好きになるわけがない。」

その苦痛に染められた表情で彼は言い続ける。

「僕は弱かった、それで、取り返しのつかない間違いをした。」

それってどういうこと？

「取り返しのつかない間違い？何のこと？」

「僕、僕。僕は……」

明智は晶の腕から逃げ出し、目を閉じ、頭を横に振る。

「いやだ、今は思い出したくない、いや、もう二度と思い出したくない。僕は、僕は……」  
涙を必死に堪えようとしていた明智は気持ちを抑えきれず、その雫は彼も目からポロ

ボロと落ち始める。

「明智君。」

晶は戸惑う、これは明智の隣に向かうべきか、ティッシュを持ってくるべきか。結局晶はカバンの中からティッシュを取り出し、明智の涙を拭き始める。それでも、明智はまだ必死に涙をこらえていると晶はわかっている。

「我慢しなくていいよ、泣きたければ、泣けばいい。」

「でも、泣いたら、また殴られる。」

明智の声は涙にむせられている。

晶にはそれを理解することができない。

「殴られる？ 誰に？」

「大人たちに、いつも、僕がうるさくって寝られないと言っている。」

「え？」

やっとわかった、これはまた明智が抑え続けていた子供の自分だ。それはきつと居候家庭で起こったでき事。

「今は私達しかいないよう、ほかにだれもない。」

「大人たちはほかの部屋にいる。怒鳴りながら出てくるよ。」

「そんなことないから、私を信じて。」

晶は明智の肩に手を置く。

「泣いてもいいよ、明智君。」

それを聞いて、明智はもう涙をこらえることができなくなる。爆発的に泣き出し、まともに声すら出なくなる。

まるで改心された鴨志田や班目みたいだ。拭いても、涙はまた彼の目から出る。それでも、晶はせかさず、彼の涙が止まるまで拭き続ける。

「今言いたくなくてもいい。言いたくなったら、私いつでも聞くから。」

明智は何も言わなかった、ただ恥ずかしそうに俯いている。

「もう寝ないと、明日は早いよ。」

晶はそう言う。

「寝たくない。」

またこれ。晶はため息をつく。

「もう立ったまま寝てるよ、明智君。」

「終わらせたくない。」

「何のこと？」

「今のこと終わらせたくない。これは夢だろう。」

少し止まり、明智はまた口を開く。

「そうだ、君が僕のこと心配してくれるといった、これは夢だ、この夢を終わらせたくない。」

と明智は呟く。

「目を覚ますと、夢が終わってしまう。でも寝ないと、目を覚ますこともない。だから寝たくない。それで目を覚ますこともできない。」

「明智君。」

彼の崩壊した理論がおかし過ぎて、晶は笑いたくなる。でもそれだけ明智は傷つけられたってことだよ。

「これは夢じゃない、現実だよ。」

「現実？じや、明日目を覚ましたら、まだ僕のことを心配してくれるの？」

「もちろんだよ。」

沈黙。

「わかった。」

やっと妥協してくれたらしい。

「明智君。お休み。」

晶は明智を抱きしめ、軽くお休みのキスをする。それが彼を微笑ませたが、彼はその場から動かない。

晶は電気を消し、自分のベッドに戻る。すぐに眠りについたが、少し経つとまた目が覚めます。

「晶？」

小さいが、明智の声が聞こえてくる。

「何？」

その声で、晶は目を覚ます。明智は彼女のベッドの隣で立っている。

「明智君、どうした？」

明智は手を伸ばし、枕を沿って晶の頭を探す。何回彼女の髪をなで、最後は彼女の顔に止める。彼は動きを止め、手を一度離す、少し音がした後、彼はもう一度彼女の顔を触れる。その感触から、先の音は明智が手袋を外す音だ。

「明智君？」

彼はじっくりと晶の顔と髪をなでている。まるで初めてこのようなものを触っているように、丁寧に触れている。最後に一回彼女の顔の位置を確認して、彼は晶の顔を近づき、その頬に優しく、好意を込めたキスをする。

それが温かくて、優しく、やわらかいキスだった。

明智は晶がご飯に行く前にしたように、彼女の頭をなでる。その温かさは晶の心を包み、彼女を眠りにつく。彼女が覚えた最後のことは、正義のコープがランクアップした

と宣言する声だった。



## 第三章 三日目

Unfiltered Chapter 3

## 第三章 三日目

九月十一日 日曜日

昨夜明智は久しぶりによく眠れた。ゆっくりと目を開き、日差しに照らされた壁が目に映る。もう、朝だ。仰向きして、明智は昨夜の夢を思い出す。それは現実で起こるはずがない夢だった。夢の中の明智はまだ幼く、純粋な心を持っていた。彼は晶と楽しく遊んでいた。友達みたいに喧嘩した。決して、お互いを嫌っているからではない、単なる勝利への執着による喧嘩。そのあと、仲直りして、また一緒に遊んだ。自分の過去が知られても、何も変わらない。晶は明智のことを心配していると言った。弱さを隠せなかった彼に、泣いても大丈夫だと言ってくれた。

「うん？明智君？」

すぐ隣から晶の驚いた声が聞こえる。この声を聴いて、明智はやつと自分がどこにいるかに気付く。彼は今、晶の隣で横になっている、ここは彼女のベッドだ。

「ああー！」

明智は驚いて、ベッドから落そうな勢いで後ろにさがる。

「あ、晶……ごめん。」

明智の顔は恥ずかしさで真っ赤に染まり、何を言うべきかさっぱりわからなくなる。

「本当に、ごめん。」

明智は視線をそらし、晶と目を合うことを避ける。これは夢の中の晶ではない。明智の恥ずかしい過ちを許してくれる、蔑まされない晶ではない。

「やめてよ。」

晶の声は何処か不機嫌らしい。

「本当、ごめん。何があつたかさっぱりわからないんだ。」

明智が座り上げ、ベッドから降りようとする。

「もう、二度とこのようなことが……」

「明智君がここにいたことは知らなかったし、前見た時ここにいなかった。でも、言いたいことはそれじゃない。」

晶は座り上げ、不意に明智の肩に手を伸ばす。

「私が言いたいのは、もう謝らないで、堅苦しいよ。私に謝る必要はない。大体今まで全然気づかなかつた。つまり明智君は何もしなかつたということ、でないとは絶対わかるもん。」

何を答えればいいかわからなくなった明智はその場に凍り付く。晶の手は彼の肩から離れ、頭に向かう。彼女の手の感触に昨夜の夢を思い出させる。あの現実では起こるはずがない夢。でも、なんで、なんで彼女にこんな迷惑をかけても、そう優しく接してくれるだろう。

「6:45」

晶は突然言い出す。明智は一瞬その数字の意味を理解できなかった。その手に持っているスマホを見て、明智はようやく晶は時間のことを話していることを認識する。

「まだ早いね、もう少し寝る？」

「え。」

明智は目を擦りながら言う。

「こんなことが起こった後、できそうにないよ。」

「私も目が覚めた。少し話す？時間つぶさなきゃ。」

不本意ながら明智はその提案を受け入れる。順番でシャワールームを使い、明智は晶の帰りを待ちながら、昨夜のことを思い出そうとする。確か、宿題をやるうとして、それで薬の副作用が回ってきて、眠くなった。そのあとのことはつきり覚えていない。記憶は晶に引つ張られ晩御飯を食べに行くところで途絶えた。

晶が部屋に戻り、ごく自然に彼の隣で腰を下ろす。避けられると思っていたのに。

「晶。」

明智は少し気まづく声をかける。

「昨夜は、その、葉が回ってきて、実は、あまり覚えてないんだ。一緒に晩御飯を食べに行くところまで覚えてるけど、それ以上は何も……迷惑を掛けたなら、マジでごめん。」

今度は晶の爆笑に驚かされる。

「大丈夫だよ、少し拗ねるところはあったけど、全然迷惑なんかじゃなかったよ。」

恥ずかしそうに明智は下に向く。

「ごめん、本当に何も覚えてないんだ。」

「そう……」

なぜか、晶は少しがっかりしているよう。

「ううん、何でもないや、あ、でも、ティシューを返してね。」

「えー！」

それがまるで記憶を蘇る魔法の言葉みたい。部屋に置いてあるゴミ箱を見ると、中に大量なティシューが捨てられている。え、あれって、夢じゃなかったのか？ 本当に晶の前で泣き崩れたのか？ 彼女の慰めと抱擁は現実だったのか。

「なんか思い出した？」

晶の声は明智を自分の考えから引つ張り出す。

「本当に……」

「泣いた？ そうだよ。」

「じゃ、じゃ僕が本当にあんなことを……で、君は本当に僕にあんなことを……」

もう何を話すべきかをわからなくなる明智の言葉が成り立っていない。

晶はそれで笑いだす、何か明智も彼女につれて笑い始める。

「夢じゃないと言ったでしょう。」

「晶。」

また泣きそうになる。ここで泣きだし、晶に慰められるなら、昨日のことが現実であると証明させるんじゃないかな。

でも泣く必要はなかった。晶は腕を彼の肩に巻く。

「もう一度言うね、看病ができてよかった、それに、また必要があったら、いつでもやるよ。」

口を大きく開けて、二雫の涙が零れ落ちる。それを手で振り落とす明智の心臓が跳ね上がり、ぬくもりに満たされる。まるで昨日晶に心配していると言われている時みたい。これこそ彼が求め続けていたもの——他人に認められることである。そうだ、彼が探し続けてきたぬくもりは今ここにある。誰かに受け入れられ、誰かに愛されること。ようやく手に入れた。これを探し求めていたが、もう彼にこれを得る資格なんかない。

にしても、これ以上の喜びなんて存在しない。

朝ごはんを食べるため明智と晶は一緒にレストランに向かう。食事をしながら、明智は晶に声をかける。

「晶、君はまだ未来を恐れているの？」

「え？」

「前に言ったよね、冤罪をかけられ、二度と名誉を取り戻せない、あるいは、取り戻せてもまたあつという間に失うかもしれないって話。今も、それを恐れているの？」

「時々かな。昔ほどじゃないよ。でも、私は前に進むよ。すべてを失ったわけじゃないし、希望がある限り、屈するつもりはないから。」

恐ろしい考えが明智を襲う。もし、晶は本当に怪盗団の一員で、獅童の罠に嵌められ、彼女が恐れている未来はいずれ現実になる。わずかな一瞬で全てが奪われる。そんなことを考えるだけで、胸が詰まりそうな気がする。彼女にそんなことをあわせたくない、彼女はこんなことにあうべきではない。

「怪盗団。」

明智は小さな声で呟く。

「え？」

何とかごまかすしかない。

「あ、ごめん。ちよつと考え事してた。困難に立ち向かう時、人は諦めるか、何かに思いを託し、頑張り続ける。たとえば、宗教に思いを託す人がいる。晶は怪盗団に思いを託していると言うことかな？」

晶は少し微笑む。

「そうかもね。明智君はどうなの？ 思いを託せるものはある？」

明智は必死にその答えを探した、しかし何も見つからなかった。今まではそんなことを聞かれるたびに、きれいごとで誤魔化している明智だが、それはそのような言い方は人に良く思われるからに過ぎない。しかし、今の明智はきれいごとを言おうとしない。例え晶はその答えに不満を抱いても、正直に答えたいと思う。

「わからない。」

しかし晶は不満などを口にしなかった。

「大丈夫だよ、答えられないのは別に恥じることじゃない。そもそも、そんな経歴を持っているあなたにとっては、さぞ難しい問題でしょうね。でもね、悪く思わないでほしいけど、怪盗団が希望をもたらせたいのは、あなたのような人だと思う。」

「希望をもたらせさせる？ 本当に怪盗団はただ名誉などのために行動しているわけじゃないと思う？」

「な！」

晶はかなりびっくりにしている。

「そんなこと……、そんなはずないじゃない。」

彼女は慌てて間違いを正そうとする。

「まあ、この人気が今まででないほど高まった今、彼らはどう動くかを少し見てみよう。盲目的ファンの要求やランキング結果に従いなら、彼はあくまでちやほやされたく、名声を求める人であろう。」

「私達は怪盗団での話じゃどうしても意見も統一できないみたいね。」

晶はため息をつく。

「でも、素晴らしいものに思いを託せることを願うよ。怪盗団である必要はない。いろんな事があったから、ちゃんと前に向けるための目標があったほうがいいと思う。」

復讐。明智はそのためだけに生きてきた。しかし、おかしいもんだ。まさか今更ずっと欲しがっていたものを手に入れるとは思わなかった。

朝食を済ませて、晶は授業をとりに出かける一方、明智は異世界に向かう。昨日と違って、今日の明智の調子はいい、昨夜はよく眠れたからかもしれない。明智は何の課題もなくパレスをクリアする。

最後のセーフルームに到着した明智は現在の状況を振り返る。ここから残っていることは小早川のシャドウを消すだけだ、そのためにここまで来たからな。でも、すでに



ほしいものを手に入れた今、もう復讐する必要なんか無い、獅童に認められなくてもいい。なら、小早川を殺す意味なんかあるの？

「何迷っている？」

声が届く。いや、それは彼の考えに過ぎないか。その声はロキ、復讐しか考えていないペルソナだ。

「ここまで来て、やめるとか考えてねんだろ。今までの努力をすべて無駄にする気か？復讐のためにどんだけの代償を払ったと思ってるんだ。どんだけの命を捨り潰した？ここであきらめて、何もかも正義でなくなるぞ。それでいいのか？」

「言い訳するな！」

高潔なペルソナロビンフッドが急に言い返す。

「復讐のため？正義のため？何の正義？こんなの言い訳に過ぎない。覆水盆に返らず、君がやってたことは正義であるはずがない。」

「知ってる。」

明智はだれよりも知っている。

「忘れたのか？」

またロキの声だ。

「こんなとこにやったお前に居場所なんかあるとでも思うのか？お前を受け入れてくれ

る人はいない。晶もそうだ。真実を知ったら、絶対恨まれるぞ。」

そもそも、獅童に人生をめちやくちやにされたから復讐を決めた。でも、彼の命令により、明智はどれだけの人生や命を捻り潰しただろう。本当、獅童以下のくずだな。真実を知ったら晶は彼を受け入れるはずなんかない。

「確かに居場所を失ったかもしれない。愛されなくなるかもしれない。でもお前にはもう失うものなんかないだろう、すでにすべてを失ってしまったからな。」

ロキは言う。

「獅童に苦痛を与えなければならぬ、あいつは裁かれるべきだ。それをできるのはお前しかいないんだよ。あと少しで……」

それはそうかもしれない、でも今復讐は時間が過ぎるとともに無意味に感じてきた。かつての自分は本当に利己的だな。一人の人間だけを地獄にひき落とすために、何人の人生と命を奪っただろう。獅童を滅ぼすにはあまりにも大きな代償だ。しかし、今更明智に何ができる。もう取り返しがつかない、手遅れだ。

「もう起こったことはどうしようもできない、でもまだ起こっていないことを止めることができる。」

今度はロビンフッド。

「状況を悪化させない方法くらいわかるじゃない。うまく手持ちの札を操ると何とかな

る。少し危ないが、希望を持つと何とかなる。」

「希望、ね。」

明智は小さくつぶやく。

「怪盗団が希望をもたらせたいのは、あなたのような人だと思う。」

頭の中で晶の話が響く。

怪盗団。その目的は人に希望をもたらす。本当に助を求めている人を救うために存在しているなら、それは間違いなく明智が想像した理想的なヒーローである。長年以來明智はヒーローの訪れを待っていた、しかし、誰も来なかった。でも、彼らが現れた。「遅れてもやらないよりは増し」そういう言い伝えがあったよね、残念ながら明智にとつて、もう何もかも手遅れだ。それでも……

晶を思い出す。彼女は罪を擦り付けられ、名誉が葬られた。なんで彼女はそんな目に合わないといけないんだ。彼女は獅童が怪盗団のために用意している罠に嵌められるわけには行かない。彼女は本当に怪盗団の一員であるの話だが。例えそうでないとしても、もし、怪盗団はみんな単なる晶みたいなお人好しなら、彼らを罠に嵌らせるわけにはいかない。

最初獅童と接触し始めた時、このような結末を迎えることになるなんて、明智は想像もしなかった。何等かのやばいことをさせることくらいは考えていたが、この歪んでい

る計画や命令に付き合わせることもなんて思いもしなかった。怪盗団も同じだ。彼らはこの先何を待ちわびているかに見当すらついていない。誰か彼らが嵌められる前に止めなければ、でないと明智と同じように人生をめちゃくちゃにされる。彼らを助けられる人はどうやら明智しかない。

ロキは不満げに声を出す。

「どうした、そのアニメヒーローペルソナの話を聞くつもりか？あまいな。もう一度警告する。お前みたいな人が今更何をやっても受け入れられることなんてない。晶だつてそうだ、真実を知ったら憎まれるに違いない。」

「構わないさ。」

決心はついている。

「晶のおかげで、俺が本当に大切な物を見つけた。これはほかの人のためだけじゃない、彼女のためでもある。彼女は怪盗団じゃないかもしれない。でもそんなこと関係ない。俺みたいな結末を向かう人は一人で十分だ。いろいろやらかした？もう絶望な未来しか待ち受けていない？それがどうした。何をして今まで犯した罪を償うことはできないかもしれない。でも、少しでも正しいことをしたい。」

「そういうことか。」

ロキはがっかりしている。

「本当にあまい奴だ。ここままでしてきたこと、俺がしてきたことを全部なかったことにするというのはか？じや、俺はどうすんだ！」

「何バカのことを言ってる？お前も一緒に来るんだ。この罪を犯した俺の一部だ。俺は自分が何をしたかを知ってる、お前の存在を否定することはできない。そうでないと、この罪を背負うこともできない。」

「吾は汝、汝は吾か。そうか。」

そう言いながらくすくすと笑うロキは拒絶されていないことに喜んでいるらしい。

「なんかあの晶という女に似てきたな、お前。洗脳されてんな。」

そうかもしれないなと思いつながら明智は微笑む。

葛藤しなくなった明智の心が落ち着いた。いや、ある程度落ち着いたと言ったほうが正確かな。少なくともこれからどうするべきかを考える余裕ができた。

小早川のシャドウはこの先の部屋の中にいる。明智は嘲笑い、決然と目の前の扉を見つめる。どうやら、思ったより早く獅童を裏切ることになる。そう思いつながら明智は扉を開け、部屋の中に向かう。

黒い仮面を被っているペルソナ使いを目にして、小早川のシャドウは怯えて後ろに下がる。

「ああ、君は！そうか、わかったぞ。メデイアの騒ぎ。君がここにいるということは……

彼が……」

「お前を消したい？その通りだ。」

ぼつちやりしている男のシャドウがまた怯えながら一歩下がる。

「でも、俺はそんな気がないね。」

明智は言い出す。

「もう悪党と手を組むとどうなるかわかっただろう。俺もそうだ。だったら、俺と取引しない？」

「な、何を言い出す？」

シャドウが目を丸くして聞く。

「お前、獅童のことをちくるつもりだよな。」

「そ、それは……」

「やめとけ、少なくとも、今はやめろ。そんなことしても無駄だ。潰されるだけだぞ。あいつは警察の方まで手が回っている。やつを縄に付けるには公衆を頼るしかない。公衆が警察にプレッシャーをかけ、逮捕せざるを得ない状況を作るのが一番だ。でも、それは一日二日にできることじゃない。」

「わからない。本当に彼に狙われているなら、いずれにせよ殺されるじゃないか。」  
「だから隠れるのさ。」

この土壇場の計画がうまくいく保証なんてどこにもない。そもそも認知をどうやって変えることすらわからない明智に、ほかの方法を思いつくこともできない。

「死んだふりをするんだ。」

「死んだふり？」

「現実世界の自分を影響して、廃人化されたように見せかけ、入院する。時に廃人化されても死なずに済む人はいる、まあ、死亡したとはあまり変わらない状態だけだな。そのことは獅童も知っている。そう思わせれば、もうお前に構うことはないだろう、俺の裏切りも気付かない。それで時が来て、あいつの罪が明るみに出た好きに告発していい。」

「彼の罪が明るみに出た好きに？ 待って、君、もしかして彼を怪盗団のターゲットにしたいのか？」

シヤドウはそう聞く。

「そのつもりさ。」

中らずと雖も遠からず。怪盗団から改心のやり方を聞き、それを明智自身が実行する。とりあえずそういう計画を立てている。これまで、復讐する前に怪盗団が獅童のことを気付き、復讐を成し遂げることができなくなるとを心配していたが、今彼はそう思っていない。彼は怪盗団をこの件に巻き込みたくない。それは復讐やプライドなどとは関係ない。怪盗団は彼と違い、まだ輝いている未来を持つ、獅童みたいなクズを相

手にして、それを失うのは惜しい。

「わかった、やってみるよ。生きるためにこの方法しかないし。」

小早川のシャドウがその提案を受け、姿を消した。恐らく現実の自分に戻っただろう。

こんなの初めて見た。計画がうまくいくことを祈るしかないと思智は思う。

部屋の後ろにあるもやもやの何かが膨張し、炸裂した。部屋が激しく揺れ、壁が崩れていく。何が起こったかもわからないし、計画がうまくいつているかどうかもわからない。唯一わかっているのはこのパレスは崩れ落ちている、逃げないと。

\*\*\*

今日の授業も終わった。しかし明智はまだ帰っていない。彼が泣き崩れたことを思い出し、晶は何かにつっ掛かった。明智は自分の問題を一言も打ち上げていない。

「もし君が僕の心の中をのぞくことができたとしたら、好きになるわけがない。」

彼はそう言った。

そこで晶は思いついた、心を確認する方法はある。彼女はスマホを取り出し、明智の名前を異世界ナビに入力した。

でも候補を見つからなかった。明智にパレスはいない。それ思い晶はほっとする。明智の心はまだそれほど歪んでいない。例えば本当にシャドウが存在しても、メモントス



で解決できる……はず。

ドアの開けることが晶の調査を止めた。慌ててスマホをしまい、笑いながら部屋に入ろうとしている明智に挨拶する。

「お帰り。」

明智は少し驚いているように見える。

「あ、少し驚いたよ。一人暮らししているから、お帰りと言ってくれる人がいないんだ。そうだ、晶、これ。」

そう言いながら明智はティッシュを晶に渡す。

「ティッシュを返してて言われたから。」

笑いをこらえなくなり晶は爆笑する。

今回明智はいつもみたいに恥ずそう顔をする代わりに、一緒に笑い出した。

「笑うと思ったよ。」

「少し私のことがわかってきたみたいね。」

と晶は微笑む。

「友達になれると言ったでしょう。」

「これでやっと友達ができたと言える。」

やっと友達ができた、唯一の友達だ。これはいいことであるが、その言い方は悲しい。

少しでも雰囲気を楽しにしたく晶は言い出す。

「これで私に探偵の友達がいると言えるね。かつこいいじゃない?」

それを聞いて明智は嬉しそうに笑いだす。

昼ごはんの食べるため、下のレストランに向かった二人は、テーブルでおしゃべりをしてる。

「事件のことは順調?」

と晶は聞く。

「個人的には解決したと思うよ。これで終わるといいけど。そっちは、授業はどうだった?」

「面白かった、早めに申請して、修学旅行を休んだ甲斐があつたよ。」

「なんの授業だ?」

「起業に関する話だよ。」

と晶は説明する。

「簡単にまとめると、どうやって自分の会社の事業を選ぶ、どうやって事業を始める。あとは必要としている書類や全体的の流れみたいなことかな。そのほかは始まったら、どうやって社員や客人と接するなどの話。結構勉強になったよ。今日先生は奥村フーズが社員に過重労働させていることを例にした。それが本当かどうかはわからないが、社

員をそのような感じで接してはいけないといった。」

明智はなぜ緊張している。

「君はそんなことをするはずがない。君は優しいから。」

「それは保証する。私は社員も客人も喜ぶ会社を作りたい。でも正直に言うと、まだ同のような事業をしたいかすらわからないよ。始めるにもまだ早い。どのみち高校から卒業して、大学に入った後の話になるから。今はとりあえずルブランで接客の勉強から始めたほうがいいかな。」

「ゆっくり決めていい。まだまだ時間はあるから。幸運を願うよ。」

明智は少し恥ずかしそう。

「本気で言っているからね。」

「ありがとう。」

恥ずかしそうな明智を見て笑いそうになるが、それを堪える。セレブ仮面を外した彼、その本気さはちゃんと晶に伝わった。恥ずかしくなる理由は晶にはわからないけど。

昼ごはんを経て二人はチェックアウトの準備を行うため部屋に戻る。荷物をまとめた二人はホテルを後にして、同じ電車で東京に向かう。日曜日であったが、二人は運よく席を見つけ、隣同士で座ることにする。

東京まではかなり時間がかかるため、明智は宿題を取り出し、それを済ませようとする。宿題をやる明智を見て、晶は思う、彼は一体なぜ変わったんだろう。セレブ仮面を外し、楽にしていそう。薬を飲む前の明智とそのあとの明智はまるで別人みたい。

一時間後明智は宿題をかばんに戻す。

「終わった？」

「あと少し、でも今やる気でなくて。」

「さぼってるの、探偵君？ いい成績を保つ話はどうしたの？」

「やらないと言つてない。明日締め切りじゃないし、あとでやるよ。」

「だって、昨日宿題に頑固だったから、絶対できるだけ早く宿題を済ませるタイプな優等生だと思った。」

明智は驚きで目を丸くする。

「あれも夢じゃなかったのか？」

「当然、恐らくあなたが覚えていないことも起きていたけど。」

恥ずかしそうに頭を下げる明智。

「取り乱したところを見せた。ごめん。」

「謝らなくていいといったでしょう。正直昨日のことは面白かったし。本心のままで動いているよね、テレビの演技とは大違いだ。ありのままの自分を見せたただけだよ。悪い

ことじゃないし、どっちかというところ、そういうあなたの方が好きだよ。」

その話を聞き明智は黙り、ため息をつく。

「実際今まで、本当の僕を受け入れてくれる人がいなかった。だから僕は礼儀正しく、いい子のように振る舞う。人前では常に模範生であり続ける。」

「礼儀正しくて、いい子？え？まさか本当の明智君ってわがままな子だったりするの？」

彼はふっと笑う。

「正直に言おうと、わからないんだ。長い間その模範生の仮面を被り、もう本当の自分はどうんな人かがわからなくなってきた。」

「そんなの悲しすぎる。」

思わず彼を同情したくなる。

「確かにすべての人はありのままの私達を受け入れてくれるわけじゃない、時に自分を貫くと面倒なことに巻き込まれることもある。そもそも私が自分を抑えていたら、冤罪なんかに擦り付けることなかったかもしれない。私は犯罪の場面に立ち会った結果このぎまだ。無視できなかつた、あの人を助けたいと思った。体が勝手に動いて、私が正しいと思っていたことをした。その結果がこれ。」

少し悲しく微笑み晶は言う。

「でも後悔してないよ、考えなしのロボットになりたくないから。」

「え？ロボット？」

「人はそれぞれの長所や短所がある、それが人の持ち味と私は思う。もしみんなのみんながくだらない規則に従って、全く同じようなことをして、自分の特別なポイントを隠して生きていくと、思考できないロボットと変わらないじゃない。」

「確かに。」

明智はその話に賛同する。

「でも晶、君は強いね。あんなことがあっても、君は君のまま変わらない。僕にこんなようなことが起こったら、多分この一生思考が存在しないロボットのままで生きていくことを選ぶ。君みたいな強ささえあれば、僕も……」

彼はその先の言葉を口にしなかった。

「あなたも？」

晶は問う。

明智はまた話を逸ら。

「ごめん、この話はしたくない。」

「わかった。」

明智が抱えている問題を知りたいとはいえず、言いたくないなら晶も根掘り葉掘り探るつもりはない。

「覚えてるかどうかわからないけど、私は曲げずでいたのは周りの人達のおかげ。あなたにそれが欠けていたかもしれない。」

晶は手を伸ばし、彼の腕をつかむ。

「でも恐れることはないよ、やんちゃで、わがままな探偵君。これから、私があなたの隣にいるから。友達でしょう?」

明智は感動しているらしい。

「君の優しい言葉に感謝するよ晶。その助けようとする意志も非常に素晴らしい?」  
何かを真剣に考えているように言い出す。

「自分から僕を助けたいと思った人がいなかったから、僕もほかの人を助けようとしなかった。でも、今は少しわかってきたような気がする。僕も助けたい人ができた。」  
深くため息をつき明智は続く。

「晶、君と出会えていろいろ考えないといけないことができた。だから、宿題の提出に間に合えなかったら、君のせいだからね。」

「おや、これってさぼりの言い訳かな?」

晶は軽く肘で明智にあたる。

明智は思わずに笑い出す、それを見て晶も笑う。こんな雰囲気の中で、電車は前を向いて走り続ける。

\*\*\*

渋谷に到着して後、明智のスマホが急に鳴り出す。

「またインタビュード。」

電話を切って明智は晶に言う。

「いつ?」

「一時間以内にスタジオに向かい収録を行う。今夜放送するらしい。なんか行かなくていい言い訳考えてくれる?」

「え? テレビ出演は人気を集めるから、楽しんでると思っただけで、行きたくないの?」  
「実はそんなに好んでないよ。でも行かなくちゃ。スタジオからの電話はいつもすべてが決まったと意味している。断れないんだ。」

「今夜放送するんだっけ?」

「そう、いつもと同じだよ。話をするだけだから、見なくてもいい。」

「また怪盗団の悪口?」

「ちよつと。」

明智は手を挙げ自分のため弁明する。

「僕は彼たちは正義の味方であるかどうかはわからない、とその真の目的は知らないし。しか言っていないよ。あとは悪いことに改心の力を使うかもしれないから、危ないので早



く捕まえないといけない。仮説にすぎない、悪いこと何一つ言っていないよ。」  
「わかった、わかった。」

晶は彼を止める。

「悪口じゃない、でもあなたの意見は変えてないよね。」

「僕の推測を覆すような証拠が現れるまで、僕は自分の観点を変えるつもりはない。僕がインタビューで話したことに不満を抱いているのはわかる、だから見なくていいと言った。」

「これからも一緒にいると、あなたの考えを変えることができるかな？」

もう変えてくれたよ。そう明智は思う。でもそれを晶に話せない、彼は冷たい嘲笑いで晶の問題を答える。

そうするしかない。テレビで怪盗団のことを批判することで、獅童に歪んだ計画が順調に進んでいると思わせる。あとは手遅れになる前に、怪盗団をこの混乱な事態から救い出す。

「じゃ。」

晶は譲る気持ちがあるらしい。

「どっちが正しいか勝負だ。」

「自信満々だね。どこからそんな自信がわいてくるのかな？ 甘い信念か、それとも君は

ほかの人が知らない何かを知っているか？」

僕も君が知らない情報を握っているけどね。そう思いながら明智は小さく笑う。

「どっちが正しいかは時間が教えてくれる。」

「じゃ賭けよう？」

晶はやんちゃな微笑みを見せる。

「私が勝つたら……うん、明智君にやらせたいことを考えておくよ。」

晶が負けるはずがない、明智はもう知っている。晶からどんなことをさせられるだろう。

「いいだろう、受けて立つ。でも後悔することだけは言い出せないでね。」

「後悔？なぜ後悔するの？」

ふっと晶は真実を知ったらどんなことになるだろうと思わずに考え始める。お休みのキスも親切してくれたことも、後悔し、怖がるだろう。でも明智はもう決めた。憎まれても、もう友達ではなくなってもかまわない。これはやらなければならぬ。何としても取り返しがつかない事態になる前、怪盗団をこの混乱の認知世界から引つ張り出す。彼らが自分みたいに未来を失わせたくない。それが明智にできる唯一のことである。

「明智君？」

その声が明智を自分の考えから引つ張り出す。さっきのことを説明できるはずがない。

「いいえ、なんでもない。」

「あ、明智君も私にやらせたいことを考えてね。」

「わかった。」

負けると知つていながら明智は答える。スマホをちらとみる。

「もう遅い、行かなきゃ。」

「あ、連絡先教えて。」

晶は言う。

それを聞いて明智は実に嬉しい。二人は連絡先を交換する。

「これで何か必要があつたらいつでも私に連絡できるね。」

「そつちもね。」

躊躇しながら明智は答える。

「晶、ありがとう。僕のためにいろいろしてくれて。僕に何かできることがあつたら絶対教えて、できるだけ手伝うから。」

「ありがとう、明智君が忙しいのは知ってる。だからあまり迷惑をかけないようにする。」

彼女は笑いながら言う。

「そうだ、もう行かないといけないよね。また機会があればはなそう。インタビュー頑張つて、またね。」

明智は悲しそうに晶の後ろ姿を見つめる。この平和で儂い瞬間が終わった。これからは新しい危険な任務を遂行しないと、本気を出さないと、これはおそらく最後の任務だ。

\*\*\*

その夜、晶は双葉、モルガナ、惣次郎と一緒にルブランで話をしている。付いているテレビをバックグラウンドをして、元気をつけてくれるカレーを食べている。明智のインタビューが放送されたのはその時だ。

「またあのくそ探偵だ。口を開けて自爆しろ！」

双葉が不満そうに言う。

晶は何も言わなかった。

「最後の最後、誰も予想していなかった時にメジエドを倒すなんて。」

MCの人は誇張の口調で言う。

「明智さんは怪盗団の行動に驚きましたか？」

「僕もそうなるとは思いませんでした。」

その一言だけ。

「おや？それ以上コメントなしですか？もしかして、慎重に行きたいのでしょうか？」

MCはそう尋ねる。

「ネット上のブーイングも想定外だったかしら？」

このMCは明智をめちやくちや嫌っているか、それとも公衆にあわせて、それを装っているに違いない。今の世間では明智を嫌っている人が多いから。

「それはそれは、もう何を言うべきかわかりませんよ。まだシヨックから回復していませんので。」

少し下手な冗談で不満を隠そうとする明智。

「怪チャンのランキングでは奥村フーズの社長さんがトップになっています。つまり公衆は怪盗団を奥村さんに改心させたいとのことらしいですね。明智さんは彼らがそれを従うと思いますか？」

「それはわかりませんよ。今彼らの人気が高い、名誉を求める人にはファンの要求にこたえないはずがありません。でないとも人気さががるじゃないですか。でも今有名になったから、逆に好き放題やりだす可能性もありますね。」

「好き放題ですか。そう言えば、明智さんは改心と最近の廃人化の関係性に気付いたと言いましたよね。廃人化も怪盗団の仕業と思えますか？」

「それはまだわかりません。でも廃人化も改心も不明な理由による心の急変ではありません。怪盗団は廃人化と関係しているかどうかをはつきりするには待つしかありません。遅かれ早かれ彼らは本性を現す。それまで彼らを評価するのは難しいでしょう。でも一つだけはつきりと言えることがあります。」

「それとは?」

「何があつても、最後に正義は必ず勝つ。」

「チエ。」

双葉はそれを全く信じていない。

「正義? 待つてろよ、正義をあいつに見せつけてやる。」

でも明智は少しおかしい、彼が変わった。100%セレブ仮面を發揮していない気がする。言つた通り自分の意見を曲げていないとはいえ、普段より慎重になつていて、無駄口も少ない。最後の一言を言っている時、彼の目には光が点したのは単なる錯覚だろうか。いつもの話なのに、いつもとの感じが異なる。

「晶?」

晶が心ここにあらずを気付いた双葉や呼びかける。

「何?」

「聞いている? 別に何かを聞けなかつたわけではないけど。」

双葉は後ろに立っている惣次郎に聞こえないように呟く。

「今やるべきことは、あの探偵が間違っていることを証明して、あいつに私達の正義を見せつける。だろう?」

「当然よ。」

晶は決意した。明智に自分が怪盗団に対する考えが間違っていることを思い知らせてやり、彼の人生に希望をもたらす。これで賭けにも勝てる。だったら彼に普段やらないことをやらせてみるのがいいかも。また薬を飲ませるのもいい案かもしれない。セレブ仮面を被っている明智と違って、偽りのない明智はかわい過ぎて、いじる甲斐がある。